



Anita Cerquetti

アニタ・ケルクエティ

Martha Mödl

マルタ・モードル

Rita Gorr

リタ・ゴール

Laurence Dale

ローレンス・デイル

Serguei Larin

セルゲイ・ラリン

Trudeliess Schmidt

トルデリエーゼ・シュミット

Katherine Ciesinski

キャサリン・チーシンスキ

Kristine Ciesinski

クリスティン・チーシンスキ

Gail Gilmore

ゲイル・ギルモア

Jenny Drivala

ジェニー・ドリヴァラ

Isabelle Huppert

イザベル・ユベール

Carole Bouquet

キャロル・ブーケ

# Huguenotes

Huguenotes d'amour

マリア・カラスと全ての歌手たちに捧げる

# 愛の破片

監督:ヴェルナー・シレーター  
草案:ヴェルナー・シレーター  
クレール・アルビー  
音楽監修:ピア・エリザベット・クーバー  
撮影:エルフ・イミケシュ  
美術/衣装:アルベルト・バルザック  
1996年 ドイツ/フランス カラー 122分  
配給:セテラ Cetera

# 『愛の破片』の捜しもの

堀内 修 (オペラ評論家)



さて捜し求めているものは見つかるのか？  
何を捜しているのかは最初からわかっている。「愛と死」だ。それがなぜオペラと、さらに言えばオペラの歌と結びついているのかも次第にわかってくる。散りばめられる歌の、どれにも、死の香りがする。オペラには過剰なぐらいの「愛」があるのはよく知っているけれど、こんなにも「死」でいっぱいだったっけ？ カルメンは死を予感する。ヴィオレッタは死を目前にして覚悟を決めている。なるほど。

セルゲイ・ラリンなど、現役ばりばりの歌手たちも登場し、歌うだけでなく、歌について、愛について、死について語る。でも歌手たちが真剣に、時には空虚に、語る言葉が目的じゃないのは確か。さまざまな言葉も、歌も、目的じゃない。また、上昇するエレベーターに乗って、下方に広がってゆく墓地や、歌と共に回転する水車、そしてたびたび現れる石造りの大きな丸窓や陰鬱な絵などのイメージも、とても印象的ではあるけれど、捜しているものじゃない。

そもそも見つかるはずのないものを捜しているのだと見定める。やっぱりこれは砕かれた破片なのだ。回復しようがない。そういえば、マルタ・メードルに勧められてイザベル・ユベールが歌う！のは〈フィガロの結婚〉第4幕の、バルバリーナの小アリアだった。最近では喪失感のシンボルみたいに考えられている、あの歌だ。

登場する歌手たちのうち、存在感を示すのは過去の歌手だ。イゾルデやプリユンヒルデとして、パイロイト音楽祭などで歌っていたソプラノ、メードルや、その時代のフリッカやオルトルート（いずれもワグナーの作品の役）だったリタ・ゴール。そしてアンタ・チェルケッティは、1958年、ローマ劇場のシーズン・オープニング公演のペルリーニ（ノルマ）で、マリア・カラスの代わり

にノルマを歌って評判になった、あのソプラノだ。  
そうだった。彼女たちはかつて女神だった。最もここにふさわしい人たちに決まっている。オペラの舞台上、女神として愛と死を司っていたのだから。

チェルケッティが向こうからやってくる場面で、これが特別な登場人物であるのが見てとれる。ヴェルナー・シュレーターが捜しているものに最も深く関わ

っているのが、この30年も前に引退したソプラノらしい。

ここである程度歳のいったオペラ好きにはピンとくるところがある。いまも大勢のマリア・カラス・ファンが、何かを求めて破片を捜しているくらいなのだから。ある時カラスの歌に生の高揚を、愛と死を、感じとってしまった結果というわけだ。破片を求めるのは、あの時を回復しようという試みであるに違いない。シュレーターにとっては、チェルケッティが、たったひとりではないにせよ、かつて高揚の時を得た女神だったに違いない。

トゥルーデリーゼ・シュミット（まだ現役で歌っているすばらしいメゾ・ソプラノ）とともに、チェルケッティが、かつて録音した（ノルマ）の「清らかな女神よ」を聴く。封印してあったこの録音を聴くチェルケッティが感極まっている。シュミットも。カメラのこちらにいるシュレーターは、もしかしたらそれ以上のだろう。もちろん見ている私たちだって。

捜しものは見つからない。あの時は過去にあり、回復されるはずがないのだから。「清らかな女神よ」を歌っているのは、いまのチェルケッティじゃない。でもあの歌は、ピンを捜すバルバリーナにフィガロが差し出す別のピンだった。



## Houssières d'amour

### オペラに魂を捧げたドイツの鬼才 ヴェルナー・シュレーターが放つ オペラへの愛に貫かれた深遠なるエッセイ

この映画は、自身大のオペラファンであり、オペラ演出家としても高名な映画作家ヴェルナー・シュレーターの、オペラへの愛に貫かれたドキュメンタリー風エッセイである。彼はバリ近郊の中世の修道院に、愛する歌手たちを集めた。既に引退している彼の3人のミューズたち、アンタ・チェルケッティ、マルタ・メードル、リタ・ゴールを加え、今も世界中で活躍する歌手たちが、各々の愛する人——妻、夫、恋人、子供等を連れ立ってやってくる。彼らの壮麗な歌声と対話によって、人生の最大の神秘「愛と死」の本質を説き明かそうとする……。

『薔薇の王国』のシュレーターの耽美な映像と、豪華な顔触れの歌手たちの天上的な歌声とのコラボレーションは、私たちを至上の美の世界へといざなってくれるだろう。



# 愛の破片

アンタ・チェルケッティ(ソプラノ) / マルタ・メードル(ソプラノ) / リタ・ゴール(メゾ・ソプラノ)  
ローレンス・デイル(テノール) / セルゲイ・ラリン(テノール) / イザベル・ユベール / キャロル・ブーケ  
監督:ヴェルナー・シュレーター 草案:ヴェルナー・シュレーター、クレール・アルビー  
音楽監修:ピアノ/エリザベット・クーバー 撮影:エルフィ・ミケシュ 美術/衣裳:アルベルト・バルザック  
1996年/ドイツ・フランス/カラー/35mm/ドルビーSRD/122分 配給:セテラ Cetera



10月3日(土)~16日(金)感動のロードショー!!

特別鑑賞券1500円好評発売中!!

※10/13(火)の、PM.6:45の回は休映となります。

●特別鑑賞券は、シネ・ヌーヴォ(九条/梅田)窓口およびチケットぴあ、チケットセゾン、各プレイガイドにてお求めください。

上映時間 12:00 2:15 4:30 6:45

**シネ・ヌーヴォ**  
地下鉄中央線「九条駅」6番出口下車  
大阪ドーム方向へ徒歩2分  
**TEL06-582-1416**

地下鉄中央線		一本町
九条駅		
←大阪港	アルター	6番出口
	ナルド	エレベーター
	オースト	エレベーター
シネ・ヌーヴォ	お警	商店街
	パチンコ	アーケード
	大阪ドーム	